

# 会員からの寄稿



## 中東を旅して

岩城功希  
(昭和38年農業工学科卒)

私はイスラム教とキリスト教の長い戦いの歴史に興味を抱き、歴史を勉強しながら、08年4月中東アジアから中東一帯に14世紀末大祥の地ウズベキスタンを訪ね、サマルカンドの青い空とイスラム建築の調和された姿を見て、興味を持った。そして09年10月には、イスラムの国シリア、ヨルダンを旅し、シリアの小さな町マアルーラでは、殆どの住民が、キリスト教徒であると云われ、立派な教会も良く暮らしていることをこの目で知った。更に、マダバ地図で有名な聖ジョージア教会は、ヨルダンのマダバにあり、ここでも、同じ

ように教会とモスクが共存しているのを感じた。更にモーゼが亡くなったといわれるヨルダンのネボ山では、古くから記念教会や記念碑が建てられ、そこはキリスト教徒の聖地となっている。00年3月にはローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が、この地を訪れ、「新しい世紀にキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒が和解し、この中東の地に平和を実現するように」と祈つたのは、歴史的な出来事であり、ここにはパウロ二世の記念碑が建てられているなど、ムスリムとキリスト教徒が共存出来ることは、訪れて見ないと判らなかつたほど驚かされたのだった。

イスラム教とキリスト教の争いは、十字軍遠征でも判るように、千年以来の敵同士と思つていたのだが、この情況を見て、初めて共存出来ることを知つた。ヨルダンの死海のリゾート地から、夜対岸に見えるイスラエルの明かりを見て、とても中東戦争を戦つて来た両国とは思えないほど、平和な感じを受け、何時しかイスラエルを訪ねて、人の関係を見たい思いにかられたのだった。そこでイスラエルに入



イスラエル支配下のゴラン高原

で今度はイスラエルに行こうと思つて予定を立てていたところ、11年1月チュニジアで発生したアラブの春と呼ばれる民主化運動は、瞬く間にエジプトに飛び、更に中東諸国のイスラム独裁国家へと広

がつて行き、今後その推移によつては、アラブ諸国とイスラエルとの関係が悪化し、旅行も出来なくなる可能性も考えられ、早い時期にイスラエル訪問をした方が良いと思い、急遽3月にイスラエルに旅することにした。初めは危険を伴うかも知れないので一人で行くつもりでいたが、妻がイスラエルとパレスティナ自治区の関係を判りやすく解説していたテレビ番組を偶然見て、行きたいと云い、二

人で行くことになった。中東情勢が不穏になつてゐるせいか、ツアー参加者は13人と少なく、ゆっくりと旅行出来たのは、最高であった。日程はテルアビブから地中海に沿つて北上し、ゴラン高原に入つて、ヨルダン川に沿つて南下し、パレスティナ自治区のエリコに入り、死海を通過して最南端のエイラートに行き、そこからネゲヴ砂漠を北上し、エルサレム、ベツレヘムを最後に訪問するコースだったので、初めはイスラエルの厳しさを見ることが出来なかつた。しかし、ゴラン高原を訪ねた時から少し情況は変わつて來た。もともとゴラン高原のヨルダン川から東は、シリア領であったが、六日戦争と呼ばれる第三次中東戦争でイスラエルが占領してしまつた。国連は両国の衝突を避けるために兵力引き離し地域を設けて、監視軍を派遣して管理しているが、現在、もともとシリア領であった

ゴラン高原のほとんどは、イスラエルが実効支配している。この地域はヘルモン山からの雪解け水が豊富にあるところで、水資源に恵まれ、ブドウ栽培や農地にも適していることから、イスラエルは自らの入植地を多く建設し、既にイスラエルの地図では、このゴラン高原は、イスラエル領として記されているが、これは国際的には認められていない。ところがこのことは、事実化されており、国境付近にはイスラエル軍の精銳部隊が派遣され、装甲車によるパトロールも行つており、実際に見ることも出来た。ゴラン高原から国道90号線と言うイスラエルでもつとも長い国道がヨルダンとの国境近辺を通り、南下してカバ湾のエイラートまで続き、この道路はヨルダン川西岸地区に当たるパレスティナ自治区を通つている。この地域は未だイスラエルが行政権、警察権



立入禁止地区 向こうの山はヨルダン



ベツレヘムを囲っている壁

を握つており、イスラエルとヨルダンの間では、平和条約が結ばれているので、回り道をせず安全に通過することが出来るが、一部ヨルダン川近辺には、まだ立入禁止区域があり、ここには有刺鉄線がはられ、高圧電流も流しているとか地雷も埋められていて、人々は入れないようになつてゐるところもある。しかし、行政権、警察権共にパレスティナ自治区が持つこととなつたヨルダン川西岸のエリコは、入る際にイスラエル当局の検問を受けるが、テロ防止と称した分離壁などは設置されておらず、観光客は自由に通れるようである。

これらの観光地を回つて死海のリゾート地に赴き、ここから夜間ヨルダンの灯りを眺めた時、以前対岸のヨルダンで過ごした一日を思い出した。その後最南端エイラートに行き、ここでヨルダンとエジプトへの入国検問所を車窓から眺める。パレスティナ自治区では、

めることも出来、どちらも穏やかな雰囲気で、イスラエルとヨルダン、エジプト間に平和条約が結ばれ近くに駐屯地はあるが、平和が保たれて、和やかな雰囲気を感じた。

しかし、ここからネゲヴ砂漠を北上し、エルサレムに向うと少し異変を感じた。エルサレムの近くにキリストの誕生地とされ、アラブ人の住むベツレヘムと言う古都があるが、ここは六日戦争で、イスラエルが占領し、エルサレムに近いことから、テロ防止と称し、分離壁と呼ばれる高い壁で、町全体を囲つてしまい自由に行き交うことが出来ない町としてしまったのである。このベツレヘムは、1995年パレスティナ自治区に返還されるがこの壁は、現在も活躍しており、実際にこの分離壁をこの目で見て、同じ地域に住みながら、イスラエル人は、なぜここまでしなければならないのか、理解に苦しんだ。この壁はアラブ人の過激派が多いパレスティナ自治区であるガザ地区でも、設置され、往々出来が出来ず遮断されているという。この分離壁は現在総延長800kmに渡つて設置されていると云われ、今回はベツレヘムでしか見られないが、ガザ地区は勿論、ヨルダン川西岸地区でも、グリーンラインと呼ばれる停戦ラインを超えて設置されているとも云われている。パレスティナ自治区では、

アラブ人の働く場所もなく、パレスティナ自治区管理地域からイスラエルに働きに出る人もいて、経済的にイスラエルに依存している。一方エルサレムの東エルサレムも、第三次中東戦争でイスラエルが占領し、その後領有を主張していいたヨルダンがヨルダン川西岸地区の領有を放棄し、1994年イスラエルと平和条約を結ぶので、東エルサレムは、現在イスラエルの管理下にある。これと同時にスタートしたパレスティナ自治政府が東エルサレムの領有を主張しているが、現在は実質的にイスラエルが支配し、治安も安定期である。このベツレヘムは、アラブ人が占領し、エルサレムに近いことから、テロ防止と称し、分離壁と呼ばれる高い壁で、町全体を囲つてしまい自由に行き交うことが出来ない町としてしまったのである。このベツレヘムは、1995年パレスティナ自治区に返還されるがこの壁は、現在も活躍しており、実際にこの分離壁をこの目で見て、同じ地域に住みながら、イスラエル人は、なぜここまでしなければならないのか、理解に苦しんだ。この壁はアラブ人の過激派が多いパレスティナ自治区であるガザ地区でも、設置され、往々出来が出来ず遮断されているという。この分離壁は現在総延長800kmに渡つて設置されていると云われ、今はベツレヘムでしか見られないが、ガザ地区は勿論、ヨルダン川西岸地区でも、グリーンラインと呼ばれる停戦ラインを超えて設置されているとも云われている。パレスティナ自治区では、

アラブ人の働く場所もなく、パレスティナ自治区管理地域からイスラエルに働きに出る人もいて、経済的にイスラエルに依存している。一方エルサレムの東エルサレムも、第三次中東戦争でイスラエルが占領し、その後領有を主張していいたヨルダンがヨルダン川西岸地区の領有を放棄し、1994年イスラエルと平和条約を結ぶので、東エルサレムは、現在イスラエルの管理下にある。これと同時にスタートしたパレスティナ自治政府が東エルサレムの領有を主張しているが、現在は実質的にイスラエルが支配し、治安も安定期である。このベツレヘムは、アラブ人が占領し、エルサレムに近いことから、テロ防止と称し、分離壁と呼ばれる高い壁で、町全体を囲つてしまい自由に行き交うことが出来ない町としてしまったのである。このベツレヘムは、1995年パレスティナ自治区に返還されるがこの壁は、現在も活躍しており、実際にこの分離壁をこの目で見て、同じ地域に住みながら、イスラエル人は、なぜここまでしなければならないのか、理解に苦しんだ。この壁はアラブ人の過激派が多いパレスティナ自治区であるガザ地区でも、設置され、往々出来が出来ず遮断されているという。この分離壁は現在総延長800kmに渡つて設置されていると云われ、今はベツレヘムでしか見られないが、ガザ地区は勿論、ヨルダン川西岸地区でも、グリーンラインと呼ばれる停戦ラインを超えて設置されているとも云われている。パレスティナ自治区では、

アラブ人の働く場所もなく、パレスティナ自治区管理地域からイスラエルに働きに出る人もいて、経済的にイスラエルに依存している。一方エルサレムの東エルサレムも、第三次中東戦争でイスラエルが占領し、その後領有を主張していいたヨルダンがヨルダン川西岸地区の領有を放棄し、1994年イスラエルと平和条約を結ぶので、東エルサレムは、現在イスラエルの管理下にある。これと同時にスタートしたパレスティナ自治政府が東エルサレムの領有を主張しているが、現在は実質的にイスラエルが支配し、治安も安定期である。このベツレヘムは、アラブ人が占領し、エルサレムに近いことから、テロ防止と称し、分離壁と呼ばれる高い壁で、町全体を囲つてしまい自由に行き交うことが出来ない町としてしまったのである。このベツレヘムは、1995年パレスティナ自治区に返還されるがこの壁は、現在も活躍しており、実際にこの分離壁をこの目で見て、同じ地域に住みながら、イスラエル人は、なぜここまでしなければならないのか、理解に苦しんだ。この壁はアラブ人の過激派が多いパレスティナ自治区であるガザ地区でも、設置され、往々出来が出来ず遮断されているという。この分離壁は現在総延長800kmに渡つて設置されていると云われ、今はベツレヘムでしか見られないが、ガザ地区は勿論、ヨルダン川西岸地区でも、グリーンラインと呼ばれる停戦ラインを超えて設置されているとも云われている。パレスティナ自治区では、



エルサレムの旧市街

## 都市の自然

(社)大阪自然環境保全協会理事

安富俊晴

(昭和38年農業工学科卒)

北浜で京阪電車を降り、地下鉄に乗り換える事務局に向かうずに、なにわ橋\*の上に出ると、水の都大阪の麗しい(?)姿が訪れる大阪人に誇り(?)さえ感じさせてくれる。

注\* なにわ(難波)橋はアーチ、合成桁形式の全長189.7m幅員21.8mの旧淀川(現在、途中の中ノ島を挟み、堂島、土佐堀の二つの川)に架けられている。天神橋、天満橋と共に難波の三大橋と親しまれている。

レトロチックな証券取引所ビル、中之島公会堂等に対比して、現在の大坂駅ビルを始めとするモダンな、様々な形状の超・高層・中層等ビル群の谷間に、あるピッチをもつて垂直棒(ピア)に乗って、幾何学的な水平線を引く高速道路車と人びとがそれぞれの動線で、早くにも、緩やかにも、それらの様が被写体となつて迫つて来る。その中に川面の搖つたりとした濃紺色の流れ、遊覧船(イッヒ、リーべ、ディッヒ)と聞こえてきそうな両岸の遊歩道その背景に様々な形状の樹景、花、水と緑のコントラスト……。

花 バラ園・キヨウチクトウ・

樹木 シャクヤク・サツキ  
カクラ・クスノキ・メタセコイア・カシ・フウ・イチヨウ・モクレン・ケヤキ

動物 カモメ・カモ・モズク・チドリ・フナ・スズキ・ボラ

(筆者の目撃等によるもので、正確無比なものではない。)

さらには川岸に下りて、樹皮、果実等も目視し、葉っぱを採集し、持ち帰り、ファイル化し保存。後日、時間と必要性が出た時に調査レベルのものに出来るよう保存するのである。最近はこの様な一時を持つようになり、このエリアを小学生の得意のブログにしようかとも考えたりする。

都会の中に、自然と云うものを感じさせてくれるのはここ数年の事だと思う。(といふのは偏見、その時代、その時代にも……)

以前から、此処は浪花の人々の生活に密着した場所で、もう少し下流の柳並木の垂れ下がる水面に飛び交う燕鷗に、上流側へ少し散策すると天神橋、さらには天満橋周辺の水辺が続き、緑陰にはいる。天神橋北東から見下ろす大阪城(は或意味でいにしえの時代からの原風景であると言える。)

北隣の天神橋に至る水辺がしかりである。

大阪のこの一角の自然は淀川の支流の流れというより水面と両岸

の樹木、公園内の花、時折飛び交う鳥達、そして、空である。色合は川面のディープグリーン・ブルー、ビル群・橋等のシルバー、

植樹のピンク、レッド、グリーンに、空のコバルトブルーが加わる。中心となる水面が、最上川や赤川の様に清らかな流れを望むのは無理としてももう少し浄化して欲しいものである。

更には、護岸であり、環境に配慮が見られない。土木的な対処で精一杯。

そして、やはり、緑であり、特に下流部右岸に樹木が欲しい、ビル群が接しているとはいえ、空間緑地、屋上、ベランダ、ウインドー、テラス等花壇、その線上に少しのスペース、点状でも良い、樹形の良い常緑樹を増やして欲しいものである。そして、遠景である。周辺は金剛・生駒山系、六甲山系を望むのであるが、月夜や鳥海山を望むようにいかず余程空気が澄んだ日に限られるのもこれから課題である。

そういう声が、自然環境保全を目指す、都市においてこそ貴重なものとなる。

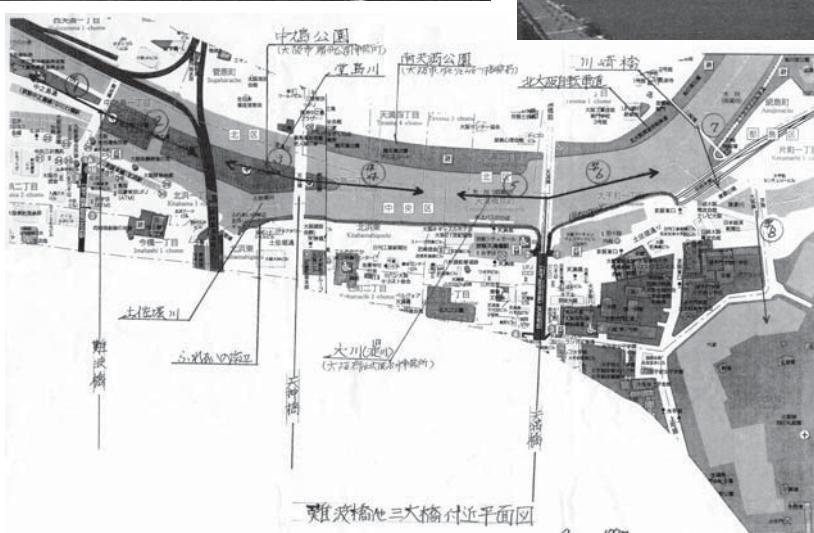
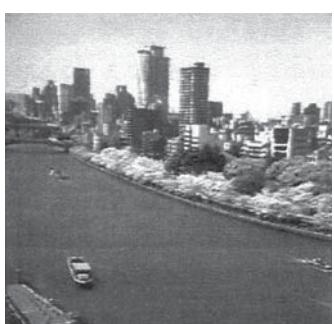
待ちに待った春が来て、桜が咲き、もう散るのかなと惜しむ、その頃、出店

つりが始まる。連休の5月3、4、5日の3日間である。

又夏、汗ばむ夜空に華やかな花火の下この川面の上、

三大橋を潜り、幾槽もの船が「わっしょい」の掛け声、团扇で祝う男女を乗せて進む天神祭があるのは7月24、25の両日である。(これはコマーシャルではなく風物誌)

(写真は日本最古の狭山池周辺樹木調査時)



右側が筆者

# 在学生の声



## —遺伝育種学研究に取り組んで—

鈴木 隆由輝

(農学研究科資源学専攻2年)

私は昨年から大学院農学研究科生物資源学専攻の植物遺伝育種学阿部研究室でイネの研究に取り組んでいます。進学した理由は将来、研究職をしていきたいことから、大学で学んだ基礎的な部分に加え、より専門的な知識や研究技術を身に付ける必要があると考えたからです。私は他大学から本大学院に進学してきたため、入学した当初は、環境の変化や研究づけの生活など、大学生時代との違いに慣れるのが大変でした。私は新しいテーマの研究を

特に印象深かったのは夏に行つたイネの交配実験でした。交配実験は花粉の飛散を防ぐため、扉を閉め切り無風状態にした温室で作業の大半を行います。当然、夏なので、室内はかなり蒸し暑く、1回の作業でかなりの体力が奪われます。しかし、秋に交配が成功したイネには種子がきちんと実っており、自分の成果がはつきりと見てどれ、とても感動しました。その経験から私は研究とは華やかなことばかりではなく、研究材料を自分で作成するという地道な作

1から行うことになつたため、研究データの蓄積がなく、ほぼ毎日、研究テーマに関する勉強や実験に時間を費やしていました。また、研究ばかりでなく、就職に向けての勉強も平行して行つており、両立にもともと苦労しました。このように大学院生活は研究と勉強の毎日でしたが、それでも大学院でしかできない多くの経験をすることができました。

## 東日本大震災を通して感じたこと

横田 牧恵

(生物生産学科3年)

今回の震災は、私が生きてきた中で最も衝撃的な出来事でした。この「在学生の声」欄への執筆を依頼されたとき、正直複雑な思いでした。私は、福島県郡山市出身で、実家は畜産業を営んでいます。福島原発の事故を知ったとき、実際に自分が制限されたり、補償対策などの課題もあります。今後、出荷停止の地域がなくなつたことで、全国の牛肉が流通することになりますが、依然として安全性の信頼回復には長い道のりを要するだろうと思います。餌や環境の管理を徹底するとともに、統一的な検査を行うことで、消費者へ安全性のアピールをしていく事

業の積み重ねもとても重要であるということを学びました。昨年の4月に入学してから、もう少しで1年と半年が経過なりました。残りの半年は研究に集中するとともに更なる実験方法の習得も行い、就職してからも活かすことができるようになつたと思います。また、研究室の教授や仲間達と良い思い出を残したいと考えています。

そこで、「フクシマ」が注目され、消費者の安心も失われてしまつたように感じました。福島県産の牛肉は、出荷停止から一ヶ月以上経つた8月25日に安全管理の態勢が整つたとして、出荷停止解除が発表されました。どの牛も出荷時期を計算しながら育てられているので、出荷停止の解除は、畜産農家にとって明るい兆しとなつたと思います。一方で、検査頭数が限られるため、出荷頭数が制限されたり、補償対策なども大事だと思います。農業が盛んで緑豊かな福島本来の姿に戻ることを願っています。

私は、動物生産学研究室に所属しています。今回の出来事を通して、動物を扱うことの重さ、責任を改めて感じました。今しかできない経験、知識をたくさん吸収して、残りの大学生活を有意義に過ごしていきたいと思います。

最後になりましたが、東日本震災により被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りします。



## 題「これから活動」

菅原暢文

(生物生産学科  
栽培土壤研究室3年)

地震が起きた日、私は仙台市にいました。大きな揺れが底するとともに、統一的な検査を行うことで、消費者へ安全性のアピールをしていく事あたりは騒然となりました。

信号機の明かりは消え、コンビニには物を買い求める人で列をなし、いつもと違う雰囲気に一刻も早く帰りたいと思いましたが、結局その日は帰ることができず、避難所で一夜を過ごしました。帰ることができたのは震災から3日後の夜でした。両親には連絡をなかなか取ることができず不安な思いをさせてしまったこともあり少し帰りづらい気持ちでいましたが、両親が温かく迎え入れてくれて、無事に帰ることができて本当に良かったと思いました。翌朝、震災家や車が津波によって流される映像は息をのむものでした。私はこの時、自分で何かすることはないかと思い、家などにあるものなどを支援物資として提供したりしましたが、それは端的なもので、一人では何もできないということを実感しました。その後、私は、巡り合わせもあり、農学部のボランティア団体「走れ!!わあチャリ」の活動の一つに参加させてもらいました。その活動は被災地での泥出し作業で、その時初めて被災地に行きました。震災からすでに3カ月以上が経過していましたが、あたりはがれきとかし、線路は寸断され3カ月前に見

たテレビの映像とほとんど変わらない風景がそこにはありました。その後も、何度も被災地に行く機会をいただき、そこで私は、今を一生懸命生き抜く人たちの姿などを目の当たりにして、勇気や元気をもらつたり、わあのチャリと



気仙沼市立九条小学校前で後列左より2人目が筆者 後列左端 農学部教育研究支援室 加藤 淳さん (53園芸卒)

いう団体で活動することで、震災後何もすることができない、そこで私は、今までみんなと一緒に活動するという大切さを教えてもらいました。震災からすでに半年以上が経過している今、少しずつがれきなどは撤去されていますが、復

興のめどは立っていません。私は、これから必要なことは、被災地の方々にもっと元気になる、そのきっかけ作りになるようなそんな活動をしていく必要だと思います。私は、まだ活動に参加させてもらつてから数ヶ月しかたつていませんが、色々な方々と出会うことができました。これからももっと色々な方々と出会い輪を広めながら、人々の心のケアになるような活動をしていきたいです。

同じく山仲間であった由井君にも協力をお願いし4月20日山形大学農学部学生ボランティアプロジェクト「走れ!!わあのチャリ」(「わあ」とは庄内弁で「私・あなた」を意味する言葉で、自転車の「輪」、人の繋がりを意味する「和」)をかけていた)を発足しました。翌日には宮城県塩竈市に教わりながら自分達で修理した自転車7台を届けました。その後も自転車の提供を続け、皆様から譲り受けた自転車なども含め、現在まで約100台の自転車を提供しました。被災地を訪れる中で、車や自転車のニーズの変化を感じ取り、



「震災発生からこれまで」

戸 貝 直 樹  
(生物環境学科4年)

3月11日、東日本大震災が発生しました。私は3月26日から被災地に物資を供給する支援チームに参加しました。支援物資を届けるために被災地を訪れる中で、車や自転車などの移動手段を流され、徒歩で移動している人が大勢いることに気づきました。どうにかして自転車を入れ持つて行けばこういった人々の助けになるのではと考え、それと同時に大学構内に放置自転車がたくさんあることを思って行つてはどうかと考えました。以前から一緒に登山やアウトドアしていく親交のあった菊池准教授に相談したところ、一人でできることではないので大学でチームを組織しようということになりました。

同じく山仲間であった由井君にも協力をお願いし4月20日山形大学農学部学生ボランティアプロジェクト「走れ!!わあのチャリ」(「わあ」とは庄内弁で「私・あなた」を意味する言葉で、自転車の「輪」、人の繋がりを意味する「和」)をかけていた)を発足しました。翌日には宮城県塩竈市に教わりながら自分達で修理した自転車7台を届けました。その後も自転車の提供を続け、皆様から譲り受けた自転車なども含め、現在まで約100台の自転車を提供しました。被災地を訪れる中で、車や自転車のニーズの変化を感じ取り、

ニーズに即した支援活動を行っていくというのが私たちの基本理念です。自転車を届ける中で楽しみや息抜きに対するニーズがあることを知り、野菜や花の苗の供給活動も始めました。その他にも、泥出しや瓦礫の撤去、広報活動、福島からの疎開生活者の支援など様々な活動を行ってきました。発足当初、活動資金は個人負担でしたが、現在では震災支援活動に対する助成金や、鶴窓会をはじめとする趣旨に賛同して頂いた方々から支援金を頂き大変助かっています。

現在も様々な団体が支援活動を行っていますが、それでも被災地ではボランティアの人手が全く足りていなく、瓦礫撤去や泥出しですらまだ終わっていない状況です。何かしたい気持ちはあるけれど初めの一歩が踏み出せていない人たちがまだまだいるはずであります。その人たちが初めての一歩を踏み出せるようなきっかけを作りを行い、人手を確保するのが私たちの課題です。3月11日から今まで、被災地では「震災」が続いています。長い道のりです。これから先も皆で助け合うために、現在

でも続く被災者の過酷な生活を、あの日テレビで津波の映像を見たときに感じたことを忘れてはいけません。

### 「走れ!!わあのチャリ」の活動報告会を行いました

森林科学コース  
菊池俊一  
(学生ボランティア・プロジェクト  
「走れ!!わあのチャリ」アドバイザー)

本年4月、震災復興支援を目的として立ち上がった山形大学農学部学生ボランティア・プロジェクト「走れ!!わあのチャリ」は、鶴窓会の皆さんご理解とご支援を賜りながら、現在も被災地等において元気に支援活動を続けています。先日行われた\*鶴寿祭においては、学生・教職員のみならず、市民の皆さんにもご参集いただき、「中間報告会」を開きました。

それぞれの報告の後には会場参加者も交えたパネルディスカッションが開かれ、様々な感想や意見が出されました。会場参加の市民からは「復興支援のため何かがしたいといふ思いを持ちながら、なかなか一步が踏み出せない市民は多いはず。その中で活動を続ける皆さんは『鶴岡の宝』だ。」と語りに思つ」といった大変嬉しいお言葉をいただきました。

またが、震災は終わっていますが、復興は終わっていない。復興の歩みは順調には見えません。3.11、あの日思つたことを忘れずに支援活動を継続していく必要があります。鶴窓会の皆さんには

今後益々のご理解とご支援をいただきますようよろしくお願い申し上げます。  
\*昨年までの11月祭(学園祭)は、今年度より鶴寿祭となり10月に開催される事になりました。



中間報告会の様子（2011年10月15日 鶴寿祭にて）

# 留学生の声



農学研究科 1年

Edith Kouko (Kenya)

I am Edith Kouko from Kenya where I am employed by the Ministry of Agriculture as an Agricultural Officer. I graduated from University of Nairobi in 2007 with a Bachelor of Science (Agriculture) degree. Currently I am pursuing a Master of Science (Agriculture) degree course at Yamagata University in Tsuruoka, Yamagata prefecture, Japan. I belong to Laboratory of Farm Business Management. My supervisor Dr. Tsuyoshi Sumita, has continued to guide and advice me on the formative stages of my thesis for which I am very grateful.

My journey to Japan begun in August 2010, when I received information from the Ministry of Agriculture Kenya for an interview at the headquarters for an opportunity to proceed for further studies in Japan. Three months after the interview, the Japanese government through JICA informed me that I had been admitted to Yamagata University for a Masters course. I heartily thanked Almighty God for the opportunity to further my studies and began my preparations.

On 6<sup>th</sup> March, 2011, I arrived at Narita airport, Japan where I met other JICA participants from other countries and JICA coordinator. From the airport we proceeded to Tokyo International Center (TIC) where we had orientation programmes and learnt about culture and the Japanese people. On 7<sup>th</sup> March, 2011 while at a briefing meeting at there was a bit of snow fall for 2 hours. We were informed by the facilitator that we were very lucky as snow fall in Tokyo is a rear phenomenon. There and then it occurred to me that this was the beginning of new experiences in Japan. Four days later, on 11<sup>th</sup> March, 2011, a massive earthquake hit Sendai, Miyagi prefecture. The effect was felt all the way to Tokyo. This for me was too many new experiences occurring too fast within a short period but this did not dampen my spirit to pursue my Masters course.

Finally, we (JICA coordinator, two other JICA participants and I) moved to Yamagata on 17<sup>th</sup> March 2011. We landed at Shonai airport to a heavy snowy welcome. I had not seen so much snow in my life! It was a very exciting experience. On 22<sup>nd</sup> March, 2011, we met the Dean, Faculty of Agriculture-Yamagata University, some professors and administrative staff. They welcomed us to the university and made us feel at home away from home.

So far my stay in Tsuruoka has been enjoyable. The beautiful green mountainous landscape, breathtaking cherry blossoms in spring, delicious Japanese foods and culinary, accommodating people and learning to speak and write Japanese will definitely make my stay in Tsuruoka interesting.

I am humbled to be associated with Yamagata University and I believe that at the end of my course I will be equipped with better Agricultural technologies in the rice sector. These technologies will definitely go a long way to improve rice farming in my country.

My deepest appreciation goes to the Japanese government through JICA, Ministry of Agriculture (Kenya) and the entire Yamagata University staff for making it possible for me to pursue further studies in Japan. To my husband Peter Jowi, daughters Lexie and Easter, thank you for your unconditional love and support.